黄鳥

【全5号】
1942年～1944年
発行　南京文学研究会・南京文化会

復刻版

幻の4・5号の発見を機に、ついに復刻！

1942年、南京で創刊された文化研究雑誌『黄鳥』。
編集兼発行人は草野心平。
当時、南京支那派遣軍報道部にいた石川信雄らの支えにより編まれた、
硬派とも言える雑誌が伝える、戦時下南京における「日本文化」の姿とは。

◉解題　大橋毅彦・鈴木ひとみ
◉推薦　秦　剛
◉体裁　A5判・上製・全1巻・総約530頁
◉定価　本体26,000円＋税

主要執筆者
会田　綱雄
市来　義道
井口　保男
石川　信雄
岩井　五郎
上路　忠雄
草野　心平
小山　武夫
周　化人
関　露
谷田　閲次
張　資平
陳　寥士
櫛島善次郎
三浦　乃亞

2018年12月刊行

限定70部

三人社

黄鳥　1942年～1944年

【復刻版概要】
◉解　題　大橋毅彦〈関西学院大学教授〉
　　鈴木ひとみ〈日本近代文学研究者〉
◉体　裁　A5判・上製・全1巻・総約530頁
　　解題・総目次・執筆者索引を付す
◉定　価　本体26,000円＋税
ISBN978-4-86691-035-2
◉推　薦　秦　剛〈北京外国語大学教授〉

関連図書

戦前期中国関係雑誌細目集覧

――昭和戦前戦中期に「内地」「外地」で発行された、中国関係の日本語雑誌――

敗戦の混乱で、いまでは幻となってしまった多くの雑誌があった。現時点での研究で明らかになったその全体像を示すべく、記事細目を、解題を加えて刊行する。

収録誌
「燕京文学」（北京・燕京文学社）
「北支那」（天津・北支那社）
「黄鳥」（南京・南京文化会）
「上海文学」（上海・上海文学研究会）
「大陸」（東京・改造社）
「大陸」（上海・大陸新報社）
「大陸往来」（上海・大陸往来社）
「中日文化」（南京・中日文化協会）
「長江文学」※「大陸新報」土曜文芸欄を含む（上海・長江文学会）
「東亜」（満鉄・東亜経済調査局）

◉戦前期中国関係雑誌細目集覧刊行会編
　代表　竹松良明〈大阪学院大学〉
◉定価　本体18,000円＋税
ISBN978-4-86691-000-0
◉体裁　A5判・上製・約450頁
◉解題　大橋毅彦〈関西学院大学〉・木田隆文〈奈良大学〉・秦剛〈北京外国語大学〉・趙夢雲〈東大阪大学〉・戸塚麻子〈常葉大学〉・和田崇〈三重大学〉
◉刊行　2018年12月

三人社
〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町４　白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369
http://3ninsha.com/

●表示はすべて税別

ご注文は書店様または直接上記までお申し込みください。

2018/9

推薦のことば

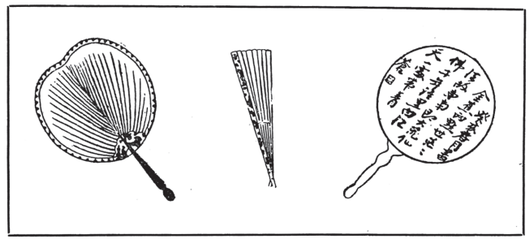
『黄鳥』復刻版によせて

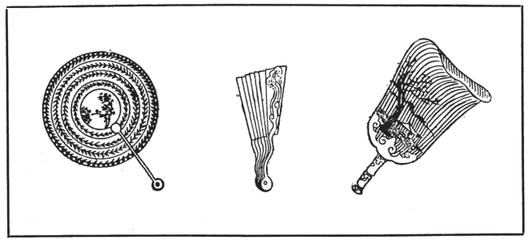
秦　剛〈北京外国語大学教授〉

戦時下の上海で発行された雑誌『大陸』に掲載されていた日本未公開の作品を、二〇一八年の『早稲田文学』初夏号の誌面を借りて紹介した。中には石川信雄の短歌も含まれていたが、石川信雄の姪の鈴木ひとみさんがそれをご覧になって、ご自身で編集なさった『石川信雄著作集』を送ってくださり、石川信雄の遺品に一号から五号までの『黄鳥』が残されていると教えてくださった。『黄鳥』の第四号、五号はこれまで確認されていなかったので、この予想外の情報には大変驚いた。一九九一年、修士一年生だったわたしは、恩師鳥居邦朗先生の調査に同行して北京図書館（現中国国家図書館）を訪れ、そこで『黄鳥』の一、二号を閲覧した。その光景は今でも鮮明に覚えているが、それが戦時下中国で発行された日本語雑誌との最初の出会いだった。それ以来、なぜかこの雑誌はずっと意識の片隅にあり続けたような気がする。

若い頃、嶺南大学に留学していた詩人草野心平が編集兼発行人であったことも当然注目されるし、同誌が詩の専門誌や一般の文芸誌ではなく「文化研究雑誌」を目指した点も興味深い。しかし、何よりも戦時下の南京で編集・発行されたことに、他の雑誌が替わることのできない特殊性がある。

今回、鈴木ひとみさんのご協力を得て『黄鳥』が復刻されるにあたり、二十七年前に同誌を見た鳥居先生の書かれた言葉が思い出される。「さまざまな夢や錯誤の中で有名無名の文学者たちの歩んだ道を、この世になかったことにするわけにはいくまい。」





黄鳥　第三號目次

將來の支那學……麓　保孝……二
中國の新聞……藤田秀雄……三
中國學校風景……菊沖徳平……一九
中國に於ける雷風雨の傳說……櫻井高量……二六
南京の春（短歌）……石川信雄……三四
石人譜（俳句）……下村非文……四六
ひとの考へ……友成左近……四八
放送劇の性格……福田敏之……五五
中國童謠瞥見……庄司猛夫……六五
悲願（詩）……大河内孝……七三
春題（詩）……齊藤齊……七四
一隅で（詩）……岩井五郎……七五
上海のための習作二つ（詩）……會田綱雄……七六
別れ（詩）……笠原丈三郎……七九
還都三周年を記念す（詩）……草野心平……七九
參戰後の中國文化問題……陳烈　大鴻悲……八一
鳥の居るところ……上路忠雄……八三
俘虜收容所……由上勝男……八七
歌時計（戲曲）……姜魏堂……九一
生（小說）……沈從文……一〇
スケッチ……三浦乃亞
後記……草野心平

原寸内容見本

華中文藝時評

石川信雄

日本文學者の中國理解

大東亞文學者大會を機緣として新中國の文學に關する論說が內地の文藝諸雜誌に一齊に現はれた。

『文藝』の『文學者の提携に就いて』（小林秀雄氏）『中國代表の決意』（河上徹太郎氏）『文學の鐵石』（窪川稻子氏）『新潮』の『中國作家諸氏に』（武田泰淳氏）『中國作家に要望するもの』（貴藤惠秀氏）『滿洲・中國の文學運務』座談會（山田清三郎、草野心平、林房雄諸氏）『文學界』の『日華の文學者に』（吉川寺次郎氏）等がそれである。

私は「文學雜國」紙上の文學者大會の速記錄及び雜誌『興亞』八月號所載の『新中國の文學運動』（河上徹太郎氏）と共にそれらの論說を通讀したが、こゝでそれらの諸說をあげつらはうと言ふ氣持はない。唯、それらの新中國文學に關心を持つ內地文學者諸氏の考へ方を、先づ自分自身の爲に、まとめて見ようと思ふのである。

前述の諸論は概ね三つの型に分類することができる。その一つは新中國の文學運動の現狀を紹介しようとするもの、その二は中國文學者との交游記、その三は新中國の文學に對して何等かの要望事項を提出して居る者である。尙その外に外國の文學者同志が提携すると言ふ事自體の意義についての論文即ち小林秀雄氏の『文學者の提携に就いて』があるが、この一文には最も感服したので、眞先に要約して見たいと思ふ。

小林氏は共同の理想を持つと言ふことと本當の人の和を得ると言ふこととは全く別物だと述べ、理想或ひは思想が同じだからと安心して人の和の問題を閑却して居ると非常に複雜で惡質な爭ひになることがあるとプロレタリア文學の例を擧げて戒めて居る。そして要は『君子は和